

沖縄で在日米軍と共に生きる

—— 基地従業員女性の経験の両義性に注目して¹

ノーラ・ワイネク

(一橋大学大学院)

佐藤文香

(一橋大学)

本稿は、在日米軍と共に生きるという経験を、沖縄の基地で働く女性の視点から描き出す。米軍基地への両義的な感情に注意を払いつつ、彼女たちが日常のなかで軍事化されるプロセスを分析する。

女性たちは軍事化されジェンダー化された構造に従順だけの犠牲者として存在するのではない。自身の社会的地位と経済的状况を改善し、時に小さな抵抗を示す能動的な行為者である。それはまた、彼女たちが在日米軍の協力者として生きることを選びとり、抑圧的な構造を自ら再生産することでもあった。

女性たちはさまざまな両義的感情——基地へのあこがれと不満、基地で働くステータスとスティグマ、兵士への恐怖と敬意、基地のない沖縄への不安と希望——を示し、「個人的なことは国際的なこと」の言葉の通り、沖縄と米軍とのアンビバレントな関係を映し出した。在日米軍と共に生きる彼女たちは、ジェンダー化された軍事化の複雑な様相を教えてくれるのである。

キーワード

沖縄、女性、米軍、基地、フェミニズム

I. はじめに

沖縄の米軍基地は、1972年の復帰以降今日にいたるまで、日本の政治を左右する重大事であり続けてきた。だが、ニュースで報じられる事故や事件、あるいは基地移設

反対運動を通じてしか基地を知らない人々にとって、基地と共に生きるという経験がいかなるものであるのかはおそらく想像しがたいことだろう。

1 本稿は、Weinek Nora and Fumika Sato, 2019, "Living with the US Military: The Women Working on Okinawa Bases," *Hitotsubashi Journal of Social Studies*, 50(1): pp. 1-14. に基づき加筆修正をおこなったものである。

近年、基地と共に生きる人々の多様な経験については、主に文化研究を中心に蓄積がみられる。たとえば、青木深は米占領下での人々の文化交流を音楽を中心に描き出し（青木 2013）、難波功土編も音楽を通して育まれる親米感覚や基地のある街を文化資源としてアイデンティティ構築していく人々の姿に光をあてた（難波編 2014）。

基地に対する人々の複雑な感情と経験に注目する点で、本稿もこの系譜に属する。しかし、本稿はフェミニスト国際関係論の視座を取り入れ、ジェンダーに注目することにより、基地と共に生きる人々の経験を文化の問題に収斂させず、国際政治の文脈において把握しようとする。その際、基地とホスト社会をつなぐ重要な存在でありながら、ほとんど研究の対象とされてこなかった基地従業員たちの経験に焦点をあてよう。政治領域からもっとも遠いところに位置すると思われてきた女性たちの経験から、個人的なことと国際的なことがいかに密接不可分に絡み合っているのかを明らかにしていくことを課題とする。

最初に、沖縄の基地従業員に焦点をあてた先行研究に依拠しながら、基地労働の歴史的背景とその現状を概観する。その上で、フェミニスト国際関係論の視座を導入し、先行研究との関係から沖縄女性をどのように位置づけるのかを確認し、本稿で用いる調査データと分析方法について述べよう。

1. 基地労働の歴史的背景と現状

沖縄の基地従業員の経験に焦点をあてた先行研究は数少ない。その中で、鳥山淳は、米軍が沖縄の労働力獲得のためにさまざまな戦略をとってきたこと、基地労働を重視した沖縄復興政策が戦後の沖縄社会を形成してきたことを明らかにした（鳥山 2007, 2013）。また、沖縄タイムスのインタビューによって基地従業員たちの多様な労働経験と米兵とのかかわりの複雑さが描きだされていた（沖縄タイムス中部支社編集部 2013）。

ここから読み取れるのは、占領直後から一貫して沖縄の人々の労働力を必要とし、彼ら・彼女らの協力を得られるよう、かつ彼ら・彼女らを管理しやすくするよう、さまざまな政策を実施してきた米軍の姿である。戦争で生活の基盤を失った沖縄の人々は、生きていくために、米軍に依存せざるを得ないような社会構造に次第に組み込まれ（鳥山 2007: 97）、結果として、米軍の権力を維持・拡大し、沖縄社会を軍事化させる役割を果たすことになった。本稿は、この意味において、基地労働と基地従業員を、政治的な存在として把握する。

2019年現在、沖縄の在日米軍では8,985人²の基地従業員が働いている（独立行政法人 駐留軍等労働者労務管理機構 2019: 21）。基地労働の法的位置づけは複雑である。まず、彼らの給料は、思いやり予算³の名目で、主に日本政府が負担するという形をとっている（鳥 2016: 19）。沖縄にお

2 沖縄県知事公室基地対策課の統計では、2017年の数値として7,052人とされている（沖縄県知事公室基地対策課 2018: 26）。

3 正式名称は在日米軍駐留経費負担である。

いては、1972年の復帰時に、基地労働は米軍による直接雇用から日本政府による間接雇用方式へと変わった（全駐留軍労働組合 2010: 26）。現在の制度下では、基地労働者の法律上の雇用主は日本（防衛省）であるが、使用者は米軍となっている。すなわち、日本政府が米軍の要求に基づいて従業員を雇用し、米軍はその使用者として従業員を指揮監督するという構造である（山川 2010: 22）。また、基地で働いている人々の中には、日本政府と米軍の労務提供に対する契約の外部で、民間の労働者派遣業者を通じて、基地関係のアルバイトに就く者たちもいる。こうした人々は基地従業員としてはカウントされず、基地の労働者派遣業者についての統計データは存在していない。本稿ではこのようなアルバイトの基地関係労働者を除き、間接雇用で日本を雇用主とする日本人基地従業員に焦点をあてている。基地労働者の統計は男女別に集計されていないか、少なくともそうしたデータは公にされていない。米軍側からは、「同一労働同一賃金」が貫徹されているからと説明されている。しかし、全駐留軍労働組合（全駐労）が指摘しているように、男女の職種分布等が異なることによって、平均賃金に男女の格差が存在することは十分あり得るだろう（全駐留軍労働組合 2010:37）。

本稿は、基地従業員のジェンダー化された経験に留意すべく、分析対象を女性従業員にあえてしぼる。小野沢あかねが明らかにしたように、戦後の沖縄では、男性より経済的に弱い立場の女性たちが基地に直接依存するような職業に多く就いていた（小野沢 2013）。中でも女性が最多を占めたの

が性産業であるが、沖縄女性は生活を支えるために、不平等な社会構造の中で、米軍相手の商売に就きやすかったのである。本稿で扱う基地従業員女性の経験も、歴史的に構築されてきた沖縄女性と米軍基地との依存関係という文脈の中で考察する必要があるだろう。

2. フェミニスト国際関係論の視座

これまで研究の対象とされてこなかった女性従業員の経験に焦点をあてる本稿は、フェミニスト国際関係論の視座から、軍事化とはどのような過程であり、ジェンダー不平等な社会構造がそれをどのように支えているのかを探っていく。

国際政治の中で「女性はどこにいるの？」という問いを発し、「個人的なことは政治的なこと」というフェミニズムのスローガンを「個人的なことは国際的なこと」へと拡張したのはシンシア・エンロー（Cynthia Enloe）である（Enloe 1989）。彼女の著作はフェミニスト国際関係論の嚆矢となり、国際政治のプレイヤーとして擬人化された国家や（男性）政治家のみを前提にするのではなく、軍事や外交から遠いと考えられてきた女性たちの個人的な経験から国際関係を捉えかえそうとした。

国際的なことと個人的なこと、国際関係と人々の日常生活が密接不可分な関係にあること——このフェミニスト国際関係論の視座に立つと、沖縄の基地の存続には基地と共に生きる人々の日常的な受容と支持が不可欠であることに気付く。米軍基地に雇用される人々は、単に労働力を提供しているだけでなく、基地を自然で問題のないも

のとして日常化することに重要な貢献をしているのである。

本稿では、沖縄の米軍基地がいかに維持されているのかを明らかにするために、エンローの重要な分析視角である「何かが徐々に、制度として軍隊や軍事主義的基準に統制されたり、依拠したり、そこからその価値をひきだしたりするようになっていくプロセス」(Enloe 2000=2006: 218)としての「軍事化」概念を用いて基地労働を分析する⁴。

英語圏においては、エンローの1989年の著作以降、女性たちのマイクロな経験が国際政治のマクロな次元といかに絡み合ったものであり、女性たちの日常生活を操作することが軍事化のスムーズな進行にとっていかに不可欠なことなのかを示すような数多くの研究が蓄積されてきた(Moon 1997; Kovner 2009; Höhn and Moon eds. 2010; Roberts 2013=2015)。日本でも、近年、同様の問題意識から、占領期における米兵と女性たちとの関係に焦点をあてた研究が歴史研究を中心に急速な進展をみせている(恵泉女学園大学平和文化研究所編 2007; 平井 2014; 茶園 2014, 2018)。

沖縄という文脈に即した研究としては、米軍基地が女性たちにもたらしてきた重大な影響として、軍隊の暴力性に着目した研究が展開されてきた。たとえば、秋林こずえは、兵士による性暴力を軍隊での訓練とそこでの敵の他者化、非人化と結びつけて論じた(秋林 2008)。高里鈴代も、兵士の暴力事件を軍隊の根本的な問題と位置づけ、

女性たちの苦難を沖縄の歴史を象徴するものとして捉えた(高里 1996)。また、軍隊が持つ暴力性をあらわすもうひとつの側面として性売買を位置づける研究もある。菊地夏野は、米軍に土地を奪われた女性たちが売春に追い込まれていく姿をAサイン制度という売買春管理体制の確立にみた(菊地 2010)。また、小野沢あかねは、元ホステスの女性への聞きとりを通じて、米軍統治下の沖縄において性を売るという経験に迫っている(小野沢 2013)。

一方、宮西香穂里は、軍隊の暴力性を前景化させるこうした研究が、沖縄女性の経験を被害に特化して対象化していることを批判し、米軍人と結婚した妻に焦点をあてることで、自立的に行動する女性たちの姿を描き出した(宮西 2012)。彼女の研究は軍隊の犠牲者としての一面的な女性像を乗りこえる点では重要であるが、軍隊との関係によって自由を獲得した沖縄女性の姿を可視化するという問題意識から、米軍と沖縄社会との間にある構造的な不平等にまったく触れていない点で問題を孕んでいると言えよう。

先行研究が明らかにしてきたように、沖縄の女性たちは軍事化というプロセスによって確かに基地から抑圧を受けている。一方で、彼女たちが基地との関わりにおいて恩恵を享受している面にも目を向ける必要がある。そこで、本稿は在日米軍と共に生きる沖縄女性たちの有する感情や経験の両義性を明らかにすることを課題にした。なぜならば、この両義性こそが、軍事

4 フェミニスト国際関係論の重要な分析概念である「軍事化」についての総説は佐藤文香(2014)を参照。

化という過程を理解するために不可欠であると考えからである。軍事化という策略は、「たとえそのダンスが不平等なパートナーの間のものであったとしても、戦いではなく、踊りのように見える」ものである(Enloe 2000: 10)。沖縄女性は米軍というパートナーと共にどのようにダンス——ジェンダー化された軍事化——を繰り返しているのだろうか。米軍基地が女性たちにもたらしている両義的な感情・経験に注意を払いつつ分析していこう。

3. 調査データと分析方法

次節以降、調査データを用いて基地従業員女性たちの経験を詳述していくが、その目的は最も基地を身近に経験している人々の声を可視化し、軍事化という過程のジェンダー化されている側面を明らかにすることにある。軍事化は個々人の生きる日常生活に組み込まれた多様な過程であるため、個々の経験を注視しなければならない。基地従業員女性たちにとって基地と共に生きるとはどのような経験であるのか——基地とのかかわりの中で生まれる衝突や葛藤、

妥協や戸惑い、抵抗や容認といった日々の交渉は数値化されたデータで十分に明らかにできるものではない。基地従業員の実情がいまだ明らかにされておらず、アクセス可能な統計データも希少であることから、研究手法として質的アプローチを採用する。

基地で働いている沖縄の女性たちは基地と共に生きるという日常をどのように経験し、在日米軍にどのような感情を抱いているのか、彼女たち自身の主観的意味づけを探るため、インタビューを行った。曖昧さやアンビバレンス、緊張感や微妙なニュアンスを大切にするため、半構造化方式にて、仕事の内容、アメリカ人との友情関係、周囲からの評価、基地で働くことの良い点・悪い点等について1時間程度のインタビュー(グループインタビューを含む)を行った。調査期間は2016年3月から6月、機縁法を用いてアクセスした対象者10名は、陸軍・海兵隊・空軍の計7つの基地に働き、職場も、レストラン、クリーニング店、ファーストフード店、オフィス、病院等さまざまである。以下の分析にもあらわれ

表 インタビュー対象者一覧

仮名	和子	幸子	好子	初子	文子	光子	節子	春子	真理子	洋子
年齢	60代	60代	50代	50代	50代	50代	40代	30代	30代	30代
婚姻状況	有配偶	有配偶	離別	離別	有配偶	有配偶	離別	有配偶	有配偶	有配偶
子ども	いる	いる	いない	いる	いる	いる	いる	いる	いる	いる
入職時の年齢	10代	40代	20代	40代	40代	40代	30代	20代	20代	20代
ライフコース	継続就業コース(1)	再就職コース(2)	独身女性コース(3)	独身女性コース(3)	再就職コース(2)	再就職コース(2)	独身女性コース(3)	継続就業コース(1)	継続就業コース(1)	継続就業コース(1)

ているように、基地で働く沖縄女性は米軍に生活を依存しており、インタビューに協力することは、彼女たち自身の生活を脅かすリスクも伴う行為である。このため、プライベートには特に配慮し、対象者の名前はすべて仮名とし、個人を特定できないよう詳しい就職先等は明らかにしなかった。

以下では沖縄社会において基地労働に就く彼女たちの葛藤、彼女たちが兵士に抱くアンビバレントな感情、基地で働く彼女たちの抵抗と恭順の両義性に光をあてていくが、これらのキーワードはすべてインタビューの中から立ちあがってきたテーマ群である。

Ⅱ. 就業動機と基地労働に伴う葛藤

以下、調査データを用いながら、基地従業員女性たちの内的葛藤に着目して分析する。沖縄社会で女性たちのおかれた地位は、彼女たちが基地で働くことを選択した動機とも密接にかかわっていた。だが手放しで基地に賛成しているわけではない彼女たちにとって、基地で就業するという経験は葛藤をもたらすものである。軍隊と関係を持つ女性へのスティグマが残る中、女性たちは微妙な舵とりを強いられてもいた。

以下では、基地従業員となることを選択した彼女たちの就業動機および葛藤、基地で働くステイタスとスティグマを記述していこう。

1. 就業動機

はじめに、女性たちを三つのライフサイ

クル・グループに分けて、その就業動機を確認しよう。

継続就業コースである第一グループ（和子、春子、真理子、洋子）の女性たちは、基地従業員となったのが10代後半～20代で、就職時に子どもがいないかまだ小さかった人々である。彼女たちは、基地に就職することで、出産・育児を理由として仕事を辞める必要がなくなった。基地での給料は沖縄社会の中で相対的に高く、育休等の福利厚生条件が整っているからである。このグループの女性たちはインタビューの時点で全員結婚し、子どもを持っており、定年まで基地で働く予定であるか、あるいは実際に働いていた。たとえば、洋子は、「民間だと〔育休を〕もらえないから〔仕事を〕辞めてしまう」⁵、基地の仕事ではなく「他の仕事だったら専業主婦」になっただろう、と述べる。他の女性たちも、子育ての時間を得られることをもっとも意識しており、基地労働を、育児と仕事を両立することのできる安定した仕事とみなしていた。

再就職コースである第二グループ（幸子、文子、光子）の女性たちは、40代以降に基地で働きはじめた人々で、出産後は基地の外でパートの仕事をし（一時的に専業主婦となった女性もいた）、子どもがある程度大きくなってから正規雇用を探していた。沖縄社会において40代という年齢で正社員になれる職場は、基地において他に存在しなかった。たとえば、このグループの光子は、「サービス残業が少ないため「自分の時間がつくれる」と言い、パート時代に

5 以下、インタビュー対象者の発言中〔 〕内は筆者による補足である。

比べてすべての面で安定していることを、基地労働の魅力として意識していた。

第三グループ(好子、初子、節子)の女性たちは、離婚経験を持つ点でこれら二つのグループと異なる。彼女たちは、生計を一人で立てねばならず、生活への不安を最も強く感じていた。たとえば、このグループに該当する節子は「普通のパートとかだったら子ども3人も育てていけなかった」と語り、シングルマザーとしての立場から基地労働を高く評価していた。

すべてのグループの女性が基地で働く大きな動機としてあげたのは、時間の余裕があることであった。この評価は基地労働に残業がないことに由来しており、彼女たちの時間へのこだわりの背景には仕事と子育ての両立の必要性がある。次に頻繁にあげられたのは給料の相対的な高さである。

基地への依存度が一番高いのは50代の独身女性または40代以上のシングルマザーが属する第三グループの女性たちである。生計を立てる上で、彼女たちにとって基地の存在はきわめて大きく、他の選択肢はないとさえ思える。第二グループの女性も年齢は50代以上であるが、結婚している彼女たちには第三グループの女性たちより余裕がある。ただし、彼女たちも基地に入る時には40代で、基地労働以外に正規雇用就く可能性はほとんどなく、基地でなければパートという選択肢しか持っていなかった。これに対して、第一グループの女性たちは、自らの理想に一番近いライフコースを実現するために基地労働を選択している。他の仕事や専業主婦という選択肢もあるため、基地しかないという思いは

他の二つのグループほど高くはない。ただし、年を経るごとに基地外における正規雇用の職がなくなっていくため、これに比例して彼女たちの基地依存度も高くなっていくようであった。

2. 就業にともなう葛藤

続いて、軍隊に依存していることから生ずる葛藤をみていこう。意外なことに、基地従業員女性の中には、基地反対運動に反感を抱く者だけでなく、共感を抱く者も存在していた。インタビューにおいて何人かの女性たちは基地労働に携わる身でありながら、沖縄には基地がない方がいいとか平和を望んでいるといった意見を表明した。だが、そう語った直後には生活のため基地で働き続けるしかないのだと言い、自分たちは信念を曲げなければならない状況におかれているのだと主張する。たとえば、好子は戦争を否定しながら基地で働き続ける気持ちを以下のように表現する。

心の底には、この戦争する軍隊のために働きたくないというのもあるんですが、でも生活しないといけないから、背に腹はかえられぬという言葉わかる？嫌だけど、生活のためにやる。

彼女たちは自らを政治的な行為者ではなく、ただ生活に必要なことをしているにすぎないと考え、かつそれを自然・当然なことと解釈していた。

定年まで基地で働き続けた和子も、「基地には反対である」とはっきり述べた後、「生活がかかっているから」難しいと続け、

自分の娘を指差して「働いたからこれが成長しているさ」と基地での雇用に対する感謝の気持ちをあらわした。女性たちは、確かに、基地労働の条件によって仕事と家庭の両立を果たし、女性であっても「自分でできる、生きていける」（幸子）という意味の自立を手にしていった。基地がライフコースの異なる女性たちのそれぞれのニーズに応え、自立の重要な道具となるからこそ、彼女たちは軍隊の存在に疑問を抱きながらも基地で働き続けることを選んでいたのである。

3. 基地で働くステイタスとスティグマ

彼女たちが基地労働にこだわる理由は決して経済的な労働条件にのみあるのではない。女性たちは基地労働者として自立できていることで自信を持っていた。そして、この自信とは決して経済的地位にのみ還元されるものでない。彼女たちはアメリカと関係をもつものが上位にあると認識しており、基地に入ることができ、時に英語を操ることのできる自らのステイタスを一般の沖縄の人よりも優位なものと考えていた。たとえば、幸子は基地に入れることに「小さな優越感」を感じると率直に語る。春子も自分が基地で働いていることを「皆うらやましいはず」だと認識していた。自らのステイタスを誇示する行為として、代表的な手段の一つが英語を話すことである。以下の春子の語りと彼女の言葉の使い方が示すように、基地従業員女性にとっての英語使用は、基地と沖縄社会を区別する特別な意味を持っている。

People don't say anything だけど、I feel that people wanna say something like いはずとか。多分 they also would like to work on base if they speak English but it is hard to get a chance to get a better job.

(周りは何も言わないけど、いはずとか言いたいのだと感じる。多分彼ら・彼女らも英語を話せるなら基地で働きたいんでしょう、でもいい仕事みつけるのは大変。)

春子の発言にあるように、基地従業員女性は英語が話せる人であり、いわゆる一般の沖縄の人が入れない世界にアクセスできる人であり、それがステイタスにつながっている。このように彼女たちはアメリカの優位性を通じて、自らの社会的地位を獲得しているのである。

一方で、インタビューからは、兵士との交際に対するスティグマがいまだに完全に消えたわけではないことも垣間みえた。たとえば、初子は、仕事をはじめる際、上司から「ここは仕事してくるところだから米兵と遊びに行ったり仕事終わってバーに行ったりしないでね」と注意されたという。これは、兵士との交際に対するスティグマがいまだに完全に消えたわけではないことを示している。つまり、基地従業員としてのステイタスを維持するために、彼女たちは、アメリカ人とかかわりのある女性というイメージから慎重に距離をとることも要するのである。

Ⅲ. 兵士に対するアンビバレントな感情

以下、基地に出入りする女性たちが兵士

に対して抱くアンビバレントな感情に注目する。基地従業員女性は、基地の中の世界を基地の外である沖縄社会と比較しながら語る際、基地を軍事的な特別な空間としては意識していないようにみえた。だが、彼女たちは決して兵士に恐怖心を抱いていないわけではないし、基地内に存在する人種化された権力関係に気づいていないわけでもない。以下では、女性たちが兵士に対して抱いている恐怖と敬意の両面に光をあて、基地内の人種化された上下関係の中で女性たちが自らの尊厳を取り戻そうとして日常的にとっている行動をみていこう。

1. 兵士に対する恐怖と敬意

まず彼女たちの兵士に対する複雑な感情をみてみよう。インタビューでは、どんなによい仕事でも、兵士と2人きりにならないような仕事や夜の仕事に異動させられるなら、それを断るか基地の仕事辞めるという意思を表明した女性がいた。たとえば、基地内のファーストフード店で働く真理子は、グレードが上にあがるだけでなくチップももらえるデリバリーのドライバー枠に異動できることになった時、家まで届けるリスクを訴える母から懇願されて異動をとりやめたという。この発言を隣で聞いていた洋子も「怖い、酔っぱらっていたら怖い」と共感を示した。

洋子は就職した時、母が「たくさんの兵士と一緒にだから心配していた」と言い、その時は「基地の中だとみんな働くため〔に〕来ているから」むしろ「基地の方が多分安全だ」ということで最終的に納得したのだと説明してくれた。つまり、基地の中で仕事

をしているかぎりにおいて、軍規に従う兵士は脅威にならないが、基地から出て厳しい監視から解放された兵士は、沖縄の女性の脅威になると考えられているのである。

また、幸子は若い頃、外で「外人に追われたことある」というエピソードに言及し、その時から夜の外出を怖いと思うようになったと語った。基地内の仕事は「平和的だ」と説明してくれた幸子であるが、この過去の経験の語りの中で、自らの職業について次のように述べた。

基地の仕事は昼だから明るい〔……〕。外人と会う機会もないし〔……〕。夜中の仕事だったらしません、もう辞めます。

ここからは、彼女たちが職場において兵士を恐怖の対象とみなしてはいるが、兵士の存在を本来的に危険なものと感じていることがわかる。

一方、恐怖を感じている女性が兵士を評価する場合もあった。たとえば、「基地は本当はない方がいい」という意見を述べた真理子は、兵士は「安全ではない」仕事をしており、「そのために私たちの仕事がある」として、自らの基地における役割を次のように語った。

軍人を守っているつもりで料理をつくっている、食べ物は大事だから。基地がない方がいいと思っているけど、もう仕方ない、武器がないと平和を守れない世界だから。〔……〕この人たちは命をかけて、国のためにやってい

るから、日本人とは気持ちが違う。全然考え方も違うと思うんだけど、沖縄で〔基地で〕働く人はお金と休みがあるから働いているけど、実際に基地の中で軍人は命をかけてやっているから〔私たちが〕応援している。応援じゃない、手伝っているというのがダメだと思わない。

つまり、真理子は戦争が「命をかけ」るような（男性的な）仕事であり、自分が日常行っている労働（「料理をつくっている」）はそれを支えるような（女性的な）仕事だと認識している。真理子のこの言葉を聞いた洋子もそれに同意し、兵士を「リスペクトはしている」と述べた。そして、2人は「基地も武器もない方がいい」（真理子）、「今は基地は多すぎる、こんなのいらぬ」（洋子）と批判的な立場を示しつつ、男性的な軍事的任務に従事する兵士を手助けすることには罪悪感を覚えていなかった。

2. 人種化された上下関係への不満と抵抗

基地従業員はその大多数が沖縄の人々であるが、上司はほとんどの場合「外人」⁶（軍属、または兵士のアメリカ人）である。もちろん、軍隊には様々な人種が存在するのだが、マヤ・アイヒラー（Maya Eichler）らがグローバルに展開する民間軍事安全保障会社に雇われる低賃金の再生産労働者の存在によって、米軍内の差異が無化され「アメリカ人」として一枚岩に上位に位置づけら

れることを発見したように（Eichler 2015）、沖縄の基地従業員の存在は同様の象徴的な役割を果たしているのである。基地内のファーストフード店のマネージャーとして働く節子は同じポジションでもアメリカ人の方が権力を持っていると感じていると語る。節子は「外人」の勤務態度を批判しながら、日本人従業員の能力を評価した。

外人従業員は英語はできるんだけど、仕事はできないわけ。接客は得意かもしれないけど、仕事自体はできないわけさ、マネジメントにしても。

「外人は仕事できない」という厳しい言い方の背後には、不平等な処遇に対して彼女が長らく抱いてきた不満がうかがえる。筆者は、基地で派遣アルバイトの経験をした沖縄の男性からも「アメリカ人は本当に働かないね、私たちがいなかったらここ〔基地〕はダメじゃない」という同種の評価を聞いたことがある。基地従業員たちのこのような発言は、彼ら・彼女らが日々感じている人種化された権力関係に対し、基地を運営し、本当に力を持っているのは兵士ではなく沖縄の自分たちなのだとすることでこれを一瞬逆転させる抵抗のナラティブのように思われる。それは、基地における人種化された上下関係の中で兵士より劣位におかれた沖縄の人々が自らの尊厳をとり戻す行為なのだ。

和子もまた、仕事場でのアメリカ人との

6 彼女たちは「外人」という言葉を頻繁に用い、兵士とアメリカ人とを区別せずひとまとめに使う傾向がある。

関係に不満を抱いていた。

やっぱりどっかで目線があると感じる。これだけは言う、いつでもやっぱり自分たち〔米兵〕は上だ。それ今になってもかわってない、いつでもかわらない。

アメリカ人から受ける人種化された差別的なまなざしへの反感は、和子の娘であり、同じ基地に働く春子とのやりとりによってさらに浮きぼりとなった。

和子：アメリカ人だからアメリカ人は上だというふうに、ずっと自分たちは上だというような教育受けているから、兵隊は。

春子：そうそうそう、in the States〔合衆国では〕ね⁷。

和子：上からの目線で沖縄の人をみるでしょう。

春子：あっちは当たり前だからね。

和子：これだけは違う。

春子：違う、違う！

和子：何年たっても、自分たちは世界一だ〔とアメリカ人は思っている〕。

春子：そうそう America is the top〔アメリカが一番だ〕。

和子：やっていることでわかる、働いて。

ファーストフード店のマネージャーとして働く節子は、インタビュー対象者の中で

唯一指導的職務に就いていた。彼女は、仕事場では日本人同士の意見が一致し、アメリカ人(同じ従業員、または上司)との意見が異なることが多々あると語る。そして、アメリカ人の意見に屈しなければならない時の行動を以下のように説明した。

上がみていない時自分たち流でやる、でも絶対と言われたらもうそうやるしかない。

ここにもまた、基地内で、日常的な小さな抗議を行うことで交渉をおこなっている沖縄女性の姿が見えてくる。

IV. 基地従業員女性たちの抵抗と恭順

基地従業員女性たちの経験を、抵抗と恭順に着目しながらさらに分析していこう。ここで用いる抵抗と恭順というキーワードは、軍事化というダンスを踊る際に「不平等なパートナー」(Enloe 2000: 10)に抗ったり、従ったりする女性たちの行為主体性を示す用語である。基地で働く女性たちは、米軍という強力な「パートナー」のリードに時に抵抗を示し、時に従順に従っていた。彼女たちの語りは、沖縄社会の基地へのまなざしにも影響されながら、さまざまな形で両義性を示した。以下では、在日米軍と共に生きる彼女たちのささやかな抵抗と恭順の両義性を、基地がない沖縄への不安と希望と、彼女たちが米軍を自衛隊との比較においてどのように捉えているのかを

7 インタビューの際、このように英語を積極的に取り入れて語る女性たちは他にもいた。彼女たちは基地内にある英語話者と非英語話者の序列化に影響を受けており、英語使用によって、自分を普通の沖縄の人々と差異化し、社会的地位を高めようとしていると考えられる。

検討することで示そう。

1. 基地がない沖縄への不安と希望

沖縄社会の中でも基地依存度の高い彼女たちは、米軍基地が存在しない沖縄をどのように語っただろうか？好子は、沖縄は「基地負担が大きい」として、経済に悪影響を与えていることを認めつつも、基地がある方がまだ沖縄の人々の生活のためになるという考えを示した。

〔基地で〕働いている人が何万人もいるし、それにかわる企業が今ない。〔……〕新しい企業ができてもしこのオーナーは本土の人たちだから、結局 mainland〔本土〕のお金になるから、基地の方がまだ直接に沖縄のお金になる。

好子のこの発言からは、二者択一ならば本土よりもアメリカに依存する方がまだ沖縄のためになるという考えが読みとれる。彼女たちの恭順は、米軍が撤退し、アメリカとの関係性（たとえそれが不平等な関係であっても）が完全になくなった時、本土の支配下におかれることに対する不安を背景としている。

節子は沖縄から基地がなくなれば「困る、沖縄はもっと貧乏になる」と言う。彼女は基地の経済を観光の経済に変えることに批判的である。観光業においては「パート〔の仕事〕しかない」からである。「自分またパートしないといけない、どうやってパートで生活していくのって感じ」と語るように、彼女は観光業が基地労働の代わ

りになると思っていない。この例からも明らかかなように、米軍基地の撤退を目指すのであれば、人々の生活が軍隊の中にかに織り込まれているのかを理解し、在日米軍が彼ら・彼女らの特定のニーズにどのように応じており、どのような役割を果たしているのか、そのかわりになりうるものは何であるのかを真剣に考える必要があるだろう。

だが、彼女たちは常に基地の存在に恭順を示すわけではなかった。以上触れたように、女性たちは時に基地反対運動への共感を示しながらも、同僚のいる「プレイクルーム」では慎重にそうした話題を避けていた。ここでは基地反対運動のようにはっきりとした形をとるわけでない、もうひとつのささやかな抵抗に光をあててみよう。それは、基地労働に携わりつつ、基地のない沖縄の未来を前向きに考えようとする女性たちの語りである。

たとえば、和子と光子は2人とも、もともと基地だった地域が栄えている場所を例にあげながら、「どうにかなる」（光子）といった前向きな態度を示す。和子はある大型のショッピングモールがかつて基地だったことを指摘し、沖縄の将来に不安を感じていないかのように語った。

流れに沿って生きるしかないじゃない〔……〕。恐れることはないと思う。返還して恐れることはない。Don't worry about it〔心配しなくていい〕。

光子も那覇にあるショッピングモールのように、「商業施設が発展」し「基地があっ

た時より利益〔が〕あがっている」ところを例にあげて、基地撤退後の「いろいろなモデルができていく」と指摘した。彼女は節子と同様に、観光業に批判的な態度も示し、基地労働に就く人々にとって代わりとなるような仕事を作らなければならないと指摘している。だが、光子は基地がなくなったらまた仕事を探せばよいのだ、という前向きな気持ちを次のように語ってくれた。

その辺はもう割り切っている、なくなったらなくなっちゃっていいやと思う。その方がいいんじゃない？子どもたちにそのまま引き継ぐよりはもうどこかで断ち切っていいかな。

このように光子は、基地がある現在よりも、多少の不安があっても基地のない将来を選ぶ。それは未来の子どもたちへの思いゆえの小さな抵抗の決意でもある。

2. 比較対象としての自衛隊

基地従業員女性が、米軍との比較対象として自衛隊をどう捉えているのかに焦点をあてると、外国の基地施設で働くことについての彼女たちの意味づけがより明確になる。まず、初子は自衛隊と米軍が沖縄の経済に与える効果を比較し、次のように結論づける。

〔基地が〕返還されて自衛隊になったとしても、そこで沖縄の〔人は〕働けない。自衛隊になったところはあるけど、自衛隊しか働けない。

初子からすると、返還されて自衛隊になるより米軍のままの方が沖縄の経済にとってはいい。それは自衛隊では沖縄の人が働けないからである。自衛隊になるということは、結局本土の人の施設になることであると彼女は思っている。つまり、彼女は、自衛隊よりも米軍の方は沖縄の人との距離が近いと考えているのだ。この彼女の距離感、基地労働が沖縄の人を受け入れているか否かによって論理立てられている。

しかし、初子が自衛隊に躊躇するのは、もう一つの理由がある。それは「70年前の戦争」で「国民」が「操作された」という歴史的背景である。

日本が戦争に巻き込まれると怖いところがある、また操作されて何も知らないまま戦わされる。

初子は日本の歴史を考慮し、日本が軍事化することに危機を感じているようである。そのため、自衛隊にも疑問を抱いている。彼女にとっては、自衛隊よりまだ米軍の方が信頼できる存在なのである。

光子もアメリカの基地は「そこまで怖くない」が、自衛隊が訓練に参加することで、戦争に向かっているという感じがすると話す。光子が米軍の基地で自衛隊の訓練を目にしたときのことを、彼女は「怖い」と語った。

実際ね、自衛隊が訓練しているの、基地で私たちみている。それをみていたら怖い。

このように、非常に軍事化された空間の中で働いている基地従業員女性は、米軍の軍事的な活動を「そこまで怖くない」（光子）と言う一方で、同じ基地で自衛隊の訓練をみると「現実的」で「怖い」（光子、初子、幸子）と語る。米軍が軍事的な行動を行うことは、彼女たちにとって自然なことであるが、日本人がそれを行うと、戦争の現実的な脅威を感じるのである。ここからは、彼女たちが米軍を自衛隊よりも安全で平和的な存在と捉えていることがわかる。彼女たちの示す米軍による軍事化への恭順は、沖縄社会における本土・自衛隊へのまなざしを背景としたものなのである。

V. おわりに

以上、本稿では、沖縄社会における軍事化された不平等なジェンダー構造の中で、自立した生活のために在日米軍と共に生きると選択をした基地従業員女性たちの姿を記述してきた。国際関係と人々の日常生活の密接不可分な関係に注意を払うフェミニスト国際関係論に基づき、本稿は、米軍基地が在日米軍と共に生きる沖縄女性たちにいかなる感情や経験を与えているのかに注目し、その両義性を記述してきた。

10名の基地従業員女性に関する調査データからは、まず、沖縄の労働市場において米軍基地が果たしている役割の大きさがうかがえた。基地における労働時間の限定性は、20代・30代の女性たちに育児と仕事の両立を可能にし、家庭における自立を獲得させていた。また、子育てを終えた女性たちにとっては、40代・50代となってもなお正社員の地位を手にし、比較的安定し

た状態で定年を迎えることができる職場であった。そして離婚した女性やシングルマザーたちにとっては、給与の相対的な高さや安定性ゆえに、一人で生計を立てることが可能になることが大きな就労動機となっていた。沖縄社会の不平等なジェンダー構造の中で、基地は彼女たちのニーズを民間会社よりはるかに満たしてくれる職場として存在していたのである。

沖縄の労働市場におけるこの特異な位置づけゆえに、基地従業員女性はたとえ軍隊という組織に疑問を抱いたとしても、基地で働き続けていた。そこで生じる内面的葛藤に対処するために、彼女たちはただ生活のために仕方がなく働いているにすぎないと自らの選択を脱政治化し、自分たちの仕事の女性的な面を強調することで、軍事的なものから距離をとろうとしていた。また、女性たちが基地労働にこだわるのは経済的な動機のみならず、権力者である米軍とかかわることで社会的地位の上昇をはかることができるからでもあった。

一方で、基地とかかわる女性に対するセクシュアライズされたステイグマゆえに、彼女たちは自らの社会的地位を微妙に舵取りしなければならぬような不安定な局面にもおかれていた。女性たちの語りからは、兵士に対する恐怖と敬意がかいまみられた。生活の安定を求めて基地労働を選んだ彼女たちは、身の安全を考えながら慎重に行動していたが、それでもなお兵士と軍に敬意を示した。ここでは経済的な不安が身体的な不安にとってかわっており、沖縄社会において自立を求める女性たちは、アンビバレントな感情を抱きながらも在日米

軍という高度に男性的な構造に依存することを選びとっていたのである。

その背後には、基地をとりまく人種化された序列の存在があった。沖縄社会の序列において常に上位におかれるのはアメリカであり、これは基地従業員のステイタスの高さにも結び付いている。誰もが入れるわけではない基地で働き、時に英語を駆使することで、彼女たちは一般の沖縄の人々よりも自らが優位な立場にあると考えていた。しかし、アメリカの優位性は基地内にも人種化された序列をもたらすことで、彼女たちの不満の源泉となる。自身が再生産しているアメリカ優位論は、米軍とのつながりを通して沖縄社会の中に地位を確立させてくれる一方で、基地内の人種化された不平等な関係には無力であった。だが、彼女たちは決して無抵抗にこの序列に甘んじていたわけではない。基地従業員たちは、アメリカ人の仕事の能力の低さや、自分たちの仕事の重要性を語りながら、自己の尊厳をとり戻そうとしていた。自らの評価を高めアメリカ人の評価を下げる彼らの語りは、基地内の人種関係を逆転させるような日常的な抵抗の実践でもあった。

そのような抵抗と恭順の両義性は、彼女たちが基地のない沖縄に対して抱く複雑な感情と、自衛隊との比較における米軍の捉え方にも垣間みられた。経済的な不安を感じる基地従業員女性たちは、基地のない沖縄を目指そうとする政策が、自分たちのように基地に依存している女性たちのニーズを適切にくみとってはいないと考えていた。だが、その恭順とは、沖縄社会における米軍と本土・自衛隊への対比的なまなざし

に影響を受けてひきだされたものであり、基地反対運動のような明確な形をとらずとも、基地のない沖縄に希望を見出すという形で彼女たちがささやかな抵抗を示すこともあった。

以上みてきたように、在日米軍と共に生きる彼女たちは、軍事化されジェンダー化された構造に従順なだけの犠牲者として存在するのではない。基地従業員女性とは、自らの社会的地位と経済的状況を改善しようとし、時に小さな抵抗の実践を示す紛れもない能動的な行為者なのである。それはまた、沖縄社会における不平等なジェンダー構造からの解放を求める彼女たちが、在日米軍の協力者として生きていくことを選びとり、ジェンダー化された軍事化の抑圧的な構造を自ら再生産することにもつながっていた。

基地従業員たちは米軍からも沖縄社会からも監視されており、個人の自由な意見を表明することが困難な立場におかれている。そのような中で、本稿の10人の基地従業員女性たちがインタビューに応じてくれたことから、多くの発見があった。「個人的なことは国際的なこと」の言葉の通り、彼女たちが抱いていたさまざまな両義的感情——基地へのあこがれと不満、基地従業員女性としてのステイタスとスティグマ、兵士への恐怖と敬意、基地のない沖縄への不安と希望——は、沖縄と米軍とのアンビバレントな関係それ自体を映し出すものだった。在日米軍と共に生きる彼女たちの語りは、ジェンダー化された軍事化の複雑な様相についてわたしたちに多くを教えてくれるのである。

だが、ジェンダー化された軍事化の解明のためには、さらに多くの基地従業員の語りを収集することが必要だろう。本稿では、あえて女性従業員に着目したが、その

全容を明らかにするためには、米軍兵士との関係の中で沖縄男性の経験をとりあげることも不可欠であり、今後の研究課題としたい。

参考文献

- 秋林こずえ, 2008, 「ジェンダーと人権の安全保障——アジアから」田中かず子編『アジアから見るジェンダー』 風行社.
- 青木深, 2013, 『めぐりあうものたちの群像——戦後日本の米軍基地と音楽 1945-1958』 大月書店.
- 茶園敏美, 2014, 『パンパンとは誰なのか——キャッチという占領期の性暴力と GI との親密性』 インパクト出版会.
- . 2018, 『もうひとつの占領——セックスというコンタクト・ゾーンから』 インパクト出版会.
- 独立行政法人・駐留軍等労働者労務管理機構, 2019, 「在日米軍従業員募集案内——在日米軍基地での勤務を希望される方のために」, 独立行政法人・駐留軍等労働者労務管理機構ホームページ, (2019年6月5日取得, <https://www.lmo.go.jp/recruitment/index3.html>).
- Eichler, Maya ed., 2015, *Gender and Private Security in Global Politics*, New York, Oxford University Press.
- Enloe, Cynthia, 1989, *Bananas, Beaches and Bases: Making Feminist Sense of International Politics*, Berkeley, University of California Press.
- . 2000, *Maneuvers: The International Politics of Militarizing Women's Lives*, Berkeley, University of California Press. (上野千鶴子監訳・佐藤文香訳, 2006, 『策略——女性を軍事化する国際政治』 岩波書店).
- 平井和子, 2014, 『日本占領とジェンダー——米軍・売買春と日本女性たち』 有志舎.
- Höhn, Maria and Seungsook Moon eds., 2010, *Over There: Living with the U.S. Military Empire from World War Two to the Present*, Durham, Duke University Press.
- 恵泉女学園大学平和文化研究所編, 2007, 『占領と性——政策・実態・表象』 インパクト出版会.
- 菊地夏野, 2010, 『ポストコロニアリズムとジェンダー』 青弓社.
- Kovner, Sarah, 2009, "Base Cultures: Sex Workers and Servicemen in Occupied Japan, 1945–1972", *The Journal of Asian Studies*, 68(3): pp. 777–804.
- 宮西香穂里, 2012, 『沖縄軍人妻の研究』 京都大学学術出版会.
- Moon, Katharine H. S., 1997, *Sex Among Allies: Military Prostitution in U.S. – Korea Relations*, New York, Columbia University Press.
- 難波功士編, 2014, 『米軍基地文化』 新曜社.
- 沖縄県知事公室基地対策課, 2018, 「沖縄の米軍および自衛隊基地 (統計資料集) 平成30年3月」, 沖縄県ホームページ, (2019年6月5日取得, <https://www.pref.okinawa.jp/site/chijiko/kichitai/syogai/toukeisiriyosyu30.html>).
- 沖縄タイムス中部支社編集部, 2013, 『基地で働く——軍作業員の戦後』 沖縄タイムス社.
- 小野沢あかね, 2013, 「米軍統治下沖縄における性産業と女性たち 1960～70年代コザ市」『年報日本現代史』 18号: pp. 69-107.
- Roberts, Mary Louise, 2013, *What Soldiers Do: Sex and the American GI in World War II France*, Chicago, University of Chicago Press. (佐藤文香監訳・西川美樹訳, 2015, 『兵士とセックス——第二次

- 世界大戦下のフランスで米兵は何をしたのか?』 明石書店).
- 佐藤文香, 2014, 「軍事化とジェンダー」『ジェンダー史学』10号: pp. 33-7.
- 島洋子, 2016, 『女性記者が見る基地・沖縄』 高文研.
- 高里鈴代, 1996, 『沖縄の女たち——女性の人権と基地・軍隊』 明石書店.
- 鳥山淳, 2007, 「復興への邁進——軍作業をめぐる人々の働き」那覇市歴史博物館編『戦後をたどる——「アメリカ世」から「ヤマトの世」へ』 琉球新報社.
- . 2013, 『沖縄／基地社会の起源と相克——1945-1956』 勁草書房.
- Weinek, Nora and Fumika Sato, 2019, “Living with the us military: The Women Working on Okinawan Bases”, *Hitotsubashi Journal of Social Studies*, 50(1): pp.1-14.
- 山川一夫, 2010, 「米軍基地で働くということ」『都市問題』101巻第3号: pp. 22-9.
- 全駐留軍労働組合, 2010, 「在日米軍基地の労働と地域——組み込まれた特異な構造」, 全駐留軍労働組合ホームページ, (2019年1月27日取得, <https://www.zenchuro.com/pdf/kyan.pdf>).

Abstract

Living with U.S. Forces in Okinawa, Japan: The Ambivalent Experiences of Women Working on Base

Nora Beryll Weinek

Fumika Sato

This paper investigates the experiences of 10 Okinawan women working on base to determine what it means to live with U.S. forces in Japan. We aim to shed a light on the militarization process by highlighting two aspects of their experiences: emancipation and oppression.

These women are not simply obedient victims of militarized and gendered structures; they are also self-determined agents hoping to improve their social and economic status, who sometimes express their dissatisfaction with the military through small acts of protest. They choose to cooperate with the military to free themselves of Okinawan society's unequal gender structures, but in doing so, they themselves eventually reproduce the oppressive structures of gendered militarization.

An analysis of these women's experiences reveals several dualities in their relationship with the military: admiration for and frustration with the bases, higher social status and stigmatization, fear and admiration of the soldiers, and unease with as well as hope for an Okinawa without bases. This reveals the ambivalent nature of the relation between Okinawa and the U.S. forces. Taking the experiences of Okinawan women seriously will lead us toward a deeper understanding of the complexity of gendered militarization in Okinawa.

Keywords

Okinawa, Women, U.S. Forces, Military Bases, Feminism